

内面世界の形成を促す人間教育原理への一考察

— ソクラテスの問答法に視点を当てて —

Research into the Principles of Human Education for the Formation of Inner Worlds

— Focusing on the Socratic Method —

奈良学園大学人間教育学部

松田 智子

MATSUDA Tomoko

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：教育という言葉の意味, ソクラテスの問答法, 内面世界を育てる人間教育

Abstract : The word “education,” which has been used since the 5th Century B.C. in Athens, Greece, is defined as fostering children to be a man of virtue. The second chapter of this paper tries to explore the image of Socrates and his catechetical method. This method is connected to Kajita’s suggestion for today that education should assume a vital role in forming children’s characters—especially, their inner worlds which relate with human growth—. In conclusion, Kajita’s determination to lead and foster children’s characters places great emphasis on these three points, “self-observation,” “self-communion,” and “self-expression.”

Keyword : The basic meaning of “education,” The catechetical method of Socrates, Human education for the formation of inner worlds

1 「教育」という言葉の意味するところ

「教育」という言葉は、いつごろからどのように使われるようになったのだろうか。今日では「教育」という言葉を聞くと学校における教育のことを連想する人が多いと思うが、実はもともと我々が想像する一斉教育をする学校で始まったものではない。

「教育」という言葉は「教」と「育」で構成されている。「教」は教えるという意味を備えているため、人類の歴史の初めのころから、生活の中で生きるための技を教えたり教えられたりする行為とともに存在したに違いない。「育」という言葉も同じように子どもが生

まれ育てたり、作物を植えて栽培したりする日常生活の行為とともに存在したに違いない。

この「教」と「育」の2文字を一緒にして「教育」という言葉を人間が作ったとき、「教」だけではなく「育」だけでもない、新たな意味を持つこの言葉は登場したに違いないと思う。この言葉の新たな意味を、人類の教育思想を振り返る中で考えていきたい。

(1) 東洋における「教育」という言葉

東洋では「教育」という言葉は、中国で「孟士」に登場するのが最初とされている。紀元前4世紀の春秋戦国時代の末期のころである。君子の三楽というのを

挙げて、その一つとして「得天下英才教育之」がいわれる。これは、天下に英才を得て教育するという意味である。教えることでも育てることでもなく教育するというのである。「孟士」の中に「教育」と言う言葉が登場するのは1回だけであり、残念であるがその意味するところは、文書ではきちんと確認できない。

「孟士」は人間の性善説を主張している。人間の性には4端という「善さ」につながる情がある。それは「仁」（あわれみ）「義」（はじらい）「礼」（うやまい）「知」（すじみち）であるという。これら「善さ」は人間の外部から飾りのように身につくわけではなく、本来的に人間に備わっているものであり、これを養うことによって人間は「善く」なるという考え方である。つまり、孟子は人間を「善く」するために学ぶことの意義については述べているが、「教育」については直接的に触れていない。

（2）西洋における教育と言う言葉

西洋の「教育」という言葉は、ラテン語からきている。そして、そのラテン語はもともとギリシア語の文化圏から生まれているのでギリシア語までさかのぼって考える必要がある。ギリシア語で「教育」を意味する言葉 Paideia（パイディア）が出てくるのは、古代ギリシアにおいて紀元前5世紀のころである。この当時のギリシアは、「都市国家」成立と繁栄の時代である。地中海の沿岸や、島々に大小無数の都市国家が成立し、法律や習慣が定まり、生産と交易が盛んになり、貨幣が流通し、文字と書物が普及しはじめ、人類文化の思想的な夜明けの時期であった。奇しくも東洋でも春秋戦国時代末期、無数の小国が乱立して互いに国内の秩序を整え文物を盛んにして覇を競っていた。こうして洋の東西を問わず「教育」という新しい言葉が必要とされる世界が訪れていたといえる。

Paideia という言葉で、ギリシアの人々は何を意味しようとしていたのだろうか。Paideia という言葉は Paideuein という動詞の名詞系であるが。その Paideuein というのは Paidos（子ども）という言葉をもとに動詞として用いたものである。つまり「子どもを…する」という意味になる言葉である。「教える」でもなく「育てる」でもない、新たな「子どもを…する」という意味の「教育」という言葉が誕生したことになる。

では、子どもをどのように育てようとしたのだろうか。

その回答は、当時のギリシアで大変な評判をとったアリストファネスの喜劇『雲』の中にある。当時の喜劇は、人々の生き方や考えを生き生きと表現した、資料の一つである。この劇のテーマは、古い考え方で育った親の世代と、新しい時代の風潮に染まった子ども世代とのギャップである。『雲』には急激な社会の変化に戸惑いながら、なんとかわが子を「善く」したいと願いながら、なかなか「善く」ならないと悩む人々の姿が描かれている。親の世代は、大国ペルシアを相手に苦しい戦いを勝ち抜き、アテナイを地中海の覇者にまで成長させたという誇りがある。同時にその苦勞を知らないで、当時の繁栄の中でぬくぬくとしている若い世代への不満といらだちが、親の世代に存在する。

また、劇中には、授業料をとって若い世代に、教授する内容が正しいかただしくないかにおかまいなく、ただ訴訟に勝つための知識や言論術を教える学習塾が登場する。その塾長としてソクラテスが描かれている。ソクラテスはもちろんそのような人物ではないが、当時の庶民劇に描かれるほどアテナイの人々の間では有名人であったことが分かる。

以上のように「教育」という言葉は、紀元前5世紀のギリシア人たちの間で、子どもたちを「善く」したいという問題意識とともに生じたものであるといえる。つまり「教育」とは「子どもたちを善くしようとする働きかけ」を意味する言葉である。当時の子どもとは、幼児や児童を指すのではなく12歳以上の青年期を迎えようとする時期の若者を指していることが多いようである。

（3）教育の目的

「教育」というのは「子どもたちを善くしようとする働きかけ」であることは先述してきた。現実的にはその働きかけを受けるのは、子どもだけとは限らず、それは大人まで対象になっている。

ここまでは「教育」と言う言葉の発生を振り返って見たが、これは同時に教育についての人々の考えが明確な形をとっていく過程であり、さらに教育の目的が形成されていく過程を意味している。

親がわが子を「善く」したいと思うことは、すべての時代のあらゆる人間にとって当然のことであろう。さらに大人たちが、自分より若い世代の人々を「善く」したいと考えるのも人間として普遍的なことであろう。

これらの子どもを「善く」しようとする働きかけである「教育」は、古代ギリシアの喜劇『雲』に見られるように、けっして容易なことではない。しかし、親は子どもを「善く」としたいと願ひ、大人は社会の若者を「善く」としたいと願うのは当然である。だからこそ人間は、それを「教育」ということばで取り上げて、子どもを「善く」とするとはどういうことか、「善く」する有効な方法はどのようなものかなど、その目的や方法を、あれこれと工夫してきたのである。これが今日へと続く「教育」という営みの始まりであろう。

2 ソクラテスの教育

1章で述べたような社会的な背景の中で、哲学者・教育思想家であるソクラテスは登場した。ソクラテスはアテナイの人々が悩んでいた「教育」の問題を進んでとりあげた、歴史上初めての思想家であるといわれる。

しかし、ソクラテスは自分の教育観や思想について、一文字も書き残していない。したがって、今日ソクラテスについて語られていることは、すべて他人の筆による間接的伝達を基礎にしている。ソクラテスに接して、ソクラテスについて書き残した人々は彼の話を、それぞれ自分の心のスクリーンに投影させて、それを文字に表現しているにすぎない。つまりその理解の深淺によって異なるソクラテス像を生み出していることになる。このような謎の多い人物であるソクラテス像であることを了解したうえで、本研究ノートを読んていただきたい。

ソクラテスは、人間が子どもを善くしたいというその「善く」とは何であるか、「善く」とするとは何をする事なのかという課題を真正面から探究した思想家である。そして自分の一生涯を、その問題を明らかにすることに徹底してささげ、すぐれて人間主義(Humanism)というべき思想を展開した教育者でもある。

ソクラテスは、ギリシアの都市国家アテナイに生まれ、紀元前399年に70歳で刑死した。父親は彫刻家で、母親は産婆であったといわれている。彼の生い立ちで知られていることはほとんどない。ソクラテスが生まれ育ったアテナイは、今日のギリシアの一小地域を占めるアッティカ地方の首都であった。当時のエーゲ海周辺はそれぞれ小地域ごとに団結して特色ある首都を

持ちいわゆる都市国家を形成していた。アテナイは、その中でも有力な都市国家であった。

このアテナイの町はソクラテスの生きていた70年ほどの間に、目まぐるしいほどの歴史的な変動を経験する。ソクラテスの青少年期は、この町は政治的・文化的な上昇期であり、彼の青壮年期は、政治的・文化的な全盛期であり、ソクラテスにとっても最も探究と形成の活発な時期であった。

その後ペロポネサス戦争で始まるアテナイの没落時代を迎えるが、ソクラテスの人間的完成および社会的・教育的活動はこの3番目の時代に集中している。この当時のソクラテスの教育思想は、彼の若い友人の一人であるプラトンが書き伝える形で、今日に残されているものが多い。

(1) 無知の知

ソクラテスの教育思想の中で最も有名なことは「無知の知」という主張である。「無知の知」というのは、ただ単に物事を知らない、知識が乏しいとことを自覚するという単純なことを意味するのではない。これは、人間の生きる上での重大な目標である、人間としての「善さ」「美しさ」についての自分自身が無知であることを自覚することを意味しているのである。

親や教師やまたは子ども自身が「善く」ありたいと思い、「善い」生き方をしたいと思う場合に、多くの人々はそれが何であるか知っているつもりになってしまっていることが多い。知っているつもり「善さ」の内容も様々である。しかしソクラテスは、その意味するところを、人間は本当には知ってはいないのではないかと、それを知っているのは神のみであろうと考えていたのである。したがって、自分が本当の「善さ」を知らないという事実を。自分自身が不断に自覚しながら「善さ」を求めつつ生きていくこと、それが人間としてもっともふさわしい生き方であり、つまり「善い」生き方であると主張する。これがソクラテスのいう「無知の知」の意味であるといわれている。

ソクラテスは、人々がこの「無知の知」を自覚することを広げる教育実践活動をした。つまり「善さ」を知っているつもりの人々に無知であることに気付かせ、それに気づきを認めつつ、そのうえにさらに「善さ」を探究して生きるという生き方をすすめた。子どもを「善く」したいと人々が願うとき、その「善さ」がどのよ

うなものであるか人々は知っていなければならないと考えるが、ソクラテスは、それにはまず自分自身がそれを本当は知らないということに、気付かなければならないと主張している。

ソクラテスはその教育実践活動である対話において、絶えず対話相手の保持する考えの破壊に従事してきていたが、その否定の矛先は、常に同時に彼自身にも向けられ、ソクラテスも絶えず自己否定、自己超克を繰り返していたといわれている。

(2) ソクラテスの教師像

以上述べたことから、ソクラテスの教師像がいくらか明らかになったと考える。ソクラテスは、教師や親や大人が、もしも子どもたちを「善く」しようと望むのであれば、彼らは、同じく「善さ」を知らないものとして、子どもたちの仲間・友だちであらねばならない。そして、同じ視線に立って一緒に「善さ」とはなにか探っていく存在でなければならないと考えていた。当時若者に様々な知識を教授することを職業としたソフィスト（教師）たちが存在していたが、ソクラテスは彼らとは一線を画していた。彼はソフィストの教える内容の価値を問わない一方的な伝達や教え込みの教育姿勢に同意していなかったからである。

ソクラテスは、何が「善い」ものか知っているつもりになっている若者に、自らどんどん語りかけ思考を促し、それを自分が知らないことに内面的に気付かせるという論破の手続きを教育活動の中心にしていた。その上で新たな「善さ」の探究に向かわせる、より高次の段階の「善さ」を発見させるという手続きとの、2段階の方法的な手続きである「問答法」といわれる対話教育を行っていた。若者に何かを教えるということは、「善い」と思われる知識を、若者にこちらから一方的に与えるのではなく、ソクラテスとの対話を通して内面の矛盾に導くことを通して相手を思考させることをねらいとしていた。そして若者の内面から新たな意味を持つ「善さ」を生み出すように手助けすることを教師の役割としていた。

3 ソクラテスの教育の今日的意味

紀元前の世界に生きたソクラテスの「無知の知」の思想は、過去の古びたものではなく、今日の我々の教育の現状を振り返るうえでも、大きな示唆を与えてくれる。

(1) 「無知の知」と人間の内面理解を促す教育

梶田（1989）は、教育において内面性にこだわることの重要性について次のように述べている。⁽¹⁾

自分なりに納得する、自分なりの実感なり本音なりを大事にする、ということは自分の中に自分なりの原理を持つことであるといってもいいでしょう。一人の人間として成長していくということはそうした原理を自分自身の中に育み、その原理に依拠しつつ考え、判断し行動し、生きていくようになることです。人間として真に自立するということは、そうした自分なりの原理を自分自身の内面に持つことなのです。

しかし現実には多くの人が、他の人はいざ知らず、自分は自分なりの原理を持って考えたり行動したりしている、と思い込んでいます。自分は自分なりにちゃんと自立していると思い込んでいるのです。ところが実際には、人間は、よほど気をつけていないと、すぐに付和雷同したり迎合したりしてしまいます。

つまり梶田は、人は自分なりの原理を持って現代社会で行動しているように見えたり、自分自身で思い込んだりしているようだが、実際はそうではないことを述べている。松田は梶田の述べる自分なりの原理とは、ソクラテスの「善さ」に通ずるものがあると考える。

松田も20年以上の小学校教師の経験があるが、外面的に成績が優れた子どもや大きな声の子どもたちの集団に同調行動をする子どもたちに、たびたび接したことを思い出す。子どもだけでなく教師の職員会議や大人の保護者会などでも同じような現象に出合ったこともある。人間とは、自分自身も含め、弱い存在であると何度も感じたものである。

梶田（1989）は子どもを本当に教育するためには、子どもをその内面から理解しなくてはいけないと主張している。これは、ソクラテスが子どもを「善く」するために「問答法」を通して、相手に語り掛けその内面に入り込んでいく教育とその根底は同じであるといえる。それについて梶田（1989）は以下のよう述べている⁽²⁾。

誰もが独自の世界を持ち、それがその人の個性を深いところから支えている、という基本的な事

実があるとしても、それは必ずしも、各自の内面世界がそのままの形で十分なものだとか、誰もが他の人の内面世界を「それでよし」と認めていくべきだとか、ということの意味するものではありません。もちろん、各自の内面世界に干渉する権利など誰にもあるわけではないのですが、当人自身にとって、それがより良いものになるように願うことは、親や教師といった立場にあるものにとっては、いわば自然の情でしょう。

その人の内面世界に明らかな誤解や認識のゆがみが含まれるような場合には、なんとかそれが是正されるように外から色々な言葉をかけたくなるはずです。

ソクラテスは、当時のアテナイの人々を相手に対話という方法で「無知の知」に気付かせていく語り掛けを行っていたといえる。

(2) 「問答法」と内面世界を育む教育

現実のわれわれの生活には、相手と白熱の論議をしても、こちらの言いたいことが理解されないことがある。詳しく説明したのに、図解やデータまで示しているのに、なぜ受け入れないのだろうと思うこともある。最後には相手が、こちらに悪意を持っていて困らせようとしているのではないかと疑うこともある。

しかし、実は自分にとっての当然の現実が、他人にとっては当然の現実でないことを、我々は忘れがちなのである。ソクラテスが自分の考えを文字として残していないために、彼の考えについて異なるソクラテス像が残されている事実からも明らかである。ソクラテスについて書いた思想家は、それぞれ異なった性格と能力を持ち、異なった人生観を持っているのである。その心のスクリーンに映るソクラテスの姿をどのように表現するかは、その人の主観的な観点に制限を受けているのである。主観とはその人が自分の目で見たり、自分の肌で感じ取ったり、自分の頭で意味づけて判断している世界を意味する。

このような現実を認めたくらうと、梶田(1989)は「内面性の人間教育を」のなかで、この変えることが困難であるといわれる内面世界そのものを変えていくことが、人間教育の目標であると述べている⁽³⁾。

内面世界に配慮し、そうした内面世界に着目した教育を考えていくことは、一人ひとりの内面世界を無条件に「是」とすることではありません。その人の持つ実感・納得・本音をそのまま「よし」とすることではありません。実感と言うものは独りよがりのものであることが多いでしょう。納得といっても非常に浅いものであったり、一面的なものであったりします。本音などというものは、だいたい自己中心的で、自分勝手なものが多いのではないのでしょうか。だからこそ、実感・納得・本音に配慮していくと同時に、その実感・納得・本音を変えていく教育が考えられなくてはいけないのです。

では、内面世界に配慮した教育を展開するためには、教師にどのような配慮や工夫が求められるのだろうか。まず誰もが自分の考えたことを素直に口にできる人間関係や雰囲気教師と子どもの間にできなければならない。ソクラテスは、自分自身を子どもと同じく「善さ」を知らない者として位置付け、子どもたちを仲間や友人として扱わなければいけないと考えていた。そして教師は、ともに「善さ」への探究者でなければならないとしていた。当時の若者にソフィストと呼ばれる教師に、一方的に知識や論述方法を教え込まれる教育方法が主流であったが、ソクラテスはこのような教育方法に反対をしていた。

このようなソクラテスだからこそ、教育方法も独特の形、つまり後世で「問答法」「産婆術」の名で呼ばれるような形をとることとなる。「問答法」とは、何が「善い」か知っている信じ切っている若者にソクラテスが自ら語りかけ苦しい思考を強要し、自分自身が「善さ」について無知であることに気付かせる論破の手続きである。「産婆術」とは無知を自覚した後に、ともに新たな「善さ」の探究に向かわせ、さらに高次の段階の「善さ」を発見させるという生産の手続きである。「産婆術」は、「問答法」の一部であり、後半の生産的な働きの一面を取り出したものである。

このような対話形式の教育を、ソクラテスはぶらぶらと相手と一緒に散歩しながら、他者との対話形式という形を通して、実は自己を振り返らせるとともに自己内対話の促しを行っていたようである。

(3) 自己内対話を促す教育を

松田は、ソクラテスは、「問答法」という対話による教育法、相手の既成概念や思い込みの価値観を論破する強制的な自己の振り返り作業を通して、相手に自己を内省する作業をさせていたと考える。ただその教育方法は、あまりにも大胆なので、人々に大きな衝撃や落胆や反発を与えていたようである。北畠（2008）は、クセノポンの「思い出」に登場する秀才少年エウテュデモスが、ソクラテスとの対話を通して、自己の無知を自覚した際の衝撃について、次のように述べている⁽⁴⁾。

エウテュデモスは、昔の賢人たちの書物を収集することで大変知者になったと思いがかり、我こそは徳を求めていると自負してはばからない。この秀才少年に対してソクラテスは、徳を求める人間ならば「正義の人」になろうとしているはずであるが、その「正義の正体」とは一体どのようなことか、何が正義か何が不正なのかを問いかける。

（2人の対話は略）

ソクラテスは、物事は同一のものでも、見る人の立場によってまったく逆のものに見えるとする「両論」の手法を用いて、エウテュデモスの視座の硬さを衝き、彼の考えが一面的であることを示して、エウテュデモスを意気消沈させている。

プラトンもソクラテスと対話したアルキビアデスの受けた衝撃について述べている。アルキビアデスは、「僕は娘よりもっと激しいやつに、それも人間の咬まれる場所でいちばん痛いところをかまれたのだ」というのは心というか魂と言うか」と衝撃を表現している。この激しい衝撃体験の中身は、ソクラテスの価値観が、当時のアテナイの一般の人が当然としていた既成概念と全く異質なものであったからこそ起こったものである。ソクラテスの問答法は、誰に対しても同じような内容や方法で活動したものではないとプラトンは述べている。彼は、相手の認識レベルに合わせて対話法の段階を選択して対応しているが、たえず常に相手よりも一歩先んじたところに立って、相手方に対話を迫っているとも表現している。この人間を吟味して無知や矛盾を相手に自覚させていく場面では、当然のことながら、相手はソクラテスに反感や憎しみを抱くこととなる。松田は、今日の日本の教育においても、ソクラテスほどの大きな衝撃を与えることができなくても、子どもた

ちに自分の内面を振り返らせ、子どもの心の本音の部分に変化を起こす教育が求められていると考える。梶田（1993）も、内面世界を形成する教育にとって不可欠な具体的な教育方法として、自己を見つめること・自己と対話すること・自己を表現することの重要性を提起している。

4 内面性にこだわった人間教育を

ソクラテスにとって、人間の徳とは魂の徳を意味している。それがどのようなものかについて、彼は自分の無知を自覚していた。そして、彼はその徳を追究することを人間教育の目標としていた。彼はその目標を実現させるためには、どのような教育方法をとればよいかを、直感的、体験的に把握していた。さらに、相手の魂の状況に応じて、対話を段階的に行うことにより対話法といわれる教育実践をしていったことは、特筆すべきことである。

(1) ソクラテスの内面教育の段階性

ソクラテスが行った教育の段階性について、北畠（1994）が規範知（徳という規範に対する知）の明確化に関して、次の3つの段階を挙げている。

1段階目は、相手の持つさまざまな関心を向きかえ、それを徳（魂）のほうへ向けかえるという段階である。この段階ではソクラテスは愛知者の立場に立つ教育者である。神の命を受けた、誰よりも熱心な愛知者として存在している。

2番目の段階は、関心が向けられた徳とは何であるかを問うて、相手はそのことに対して無知であることを、問答の過程を通して暴露する段階である。ソクラテスはここで、相手の規範知のレベルに応じて、様々な方法で暴露している。その過程を介して相手は、規範知のレベルが上がるように要請される。ここにおけるソクラテスの教育的立場は、自らが無知の自覚者であるとともに、相手より先に一歩先の立場に立ちながら関わっているのである。

3番目の段階は、より高度な規範知を獲得させる段階である。この段階が、いわゆる産婆術とよばれているところである。ここでのソクラテスの教育的立場は、助産者である。ソクラテス自らは知を生み出すことはしないが、出産当事者の妊娠や、出産、育児などをこの先どのようになるか見通す立場である。

ソクラテスはこのような3つの段階をたどりながら、各人が一層の規範知を持つように迫ったのである。

(2) 子どもの内面を読む人間教育

梶田は(1993)は、今日の日本の教育には、内面性にこだわる教育が求められていると述べている。そのためには「自己凝視、自己対話、自己表現」⁽⁵⁾の3つが相互に関連しながら深まること実践される教育が大切であると述べている⁽⁵⁾。これらを学校の教育課程の内外で、あるいは家庭での生活の中で、様々な場面で行うことが必要であるとの主張している。

自己凝視・自己対話・自己表現と言うのは、ただ単純に自分を思い返してみるとか、単純に自分を反省するとか、ただ思っていることを好みに表現するという簡単な意味ではない。

松田は、これをソクラテスの教育に置き換えると、先述した1段階から2段階に対応する部分であると考ええる。日本の教育においてもソクラテスの新たな徳を生み出す3段階まで求めたいところであるが、それは、学校教育だけでは限界があると思う。しかし、せめて2段階までは、実践できるように、各学校で教師が子どもの内面を読み取って教育に臨んでもらいたいと願う。

子どもの内面を読む手掛かりとして、色々なものが考えられる。まず第1に、その場その場で子どもの視線や表情やささやき、つぶやきなどを注意深く見て、教師が継続的に記録し子どもの変容を見ていくことである。例えば子どものノートや日記などがあげられる。第2に、教師から声掛けや働きかけに反応する子どもの表現の裏側を注意深く理解することである。例えば座席メモなどがあげられる。第3に活動の区切り区切りに、子どもに振り返るという活動(作文・自己評価・自分史・感想など)をさせ内面を推し図ることである。第4にもっと長い時間的な経過(1学期・1年間・2年間)の中で子どもに振り返りをさせ、自分自身が気づかなかった自分の姿や特長を浮かび上がらせることである。

5 おわりに

これまで述べてきた具体的な活動を通して、子どもの内面の育ちにこだわった教育を実践しようとする際には、その土台としての教師と子どものよりよい人間関係づくりが不可欠である。子ども一人ひとりが安心

して自分の内面を表出できる雰囲気的空間がなければいけない。かのソクラテスも、問答法の対話内容を読む限りでは、容赦なく厳しく相手を問い続けているが、対話の相手には友達や友人のような対等な関係で臨んでいたようである。

このために一番重要な要素となるのは、教師自身の考え方や心の在り方である。教師が自分の考えや感覚を、無意識のうちに絶対視してしまう価値観の偏りがあり、多様性を容認できない人である場合は、子どもは心を閉ざしてしまうだろう。ソクラテスは幼い子どもを対話の相手としなかったが、対話に臨む際は、自分を無知の知の境地に位置付け、自分の感覚を磨き、深め、柔軟に相手に合わせ対応している。

子どもの内面を読んで教育に当たるということは、単なる教育上の一技術ではない。人を人間として育てる教育に携わるものの基本的な教育姿勢である。

【引用文献】

- (1) 梶田叡一(1989)「内面性の人間教育を」金子書房 p43
- (2) 梶田叡一(1989)「内面性の人間教育を」金子書房 p29
- (3) 梶田叡一(1989)「内面性の人間教育を」金子書房 p46
- (4) 北畠知量(1994)「ソクラテスの研究」高文堂出版 p244
- (5) 梶田叡一(1993)「生き方の人間教育を」金子書房 p155,156

【参考文献】

- ・岩井靖夫(1995)「ソクラテス」勁草書房
- ・梶田叡一(1993)「内面を読む」人間教育研究協議会 教育フォーラム 13号
- ・梶田叡一(1997)「生きる力の人間教育を」金子書房
- ・梶田叡一(2001)「基礎基本の人間教育を」金子書房
- ・梶田叡一(2008)「自己を生きるという意識」金子書房
- ・加藤信朗(1996)「ギリシア教育史」東京大学出版社

- ・河合隼雄（1990）「いま『教育』とは」
岩波書店 転換期における人間 別巻
- ・村井実（1975）「教育思想」
放送大学教育振興会